

大学時代の正課外活動が社会人生活に及ぼす影響

Influence of extracurricular activities during college days on working adults' lives

金森 史枝*

蛭田 秀一**

Nobue KANAMORI*

Shuichi HIRUTA**

This study, focusing on the statement “Joining an collegiate sport club gives an advancement for employment”, aims at clarifying how the difference in type of clubs as an extracurricular activity during college days affects the fulfillment of work and the work-life balance in the working adults' lives and how the difference in the current involvement status in sports relates to the working adults' lives.

The research was conducted via internet for 800 working adults (400 males and 400 females) who are currently employed. The subjects were assigned to 4 categories regarding the activities at collegiate clubs or the others during college days: (1) those who belonged to sport clubs, (2) those who belonged to cultural clubs, (3) those who were involved in other activities, and (4) those who were involved in no activities. Statistical analyses were conducted using two-way variance analysis, ratio difference test, and logistic regression analysis.

As a result, the following findings were obtained. The male subjects who currently play sports got significantly higher scores in the items related to fulfillment of work and the items related to work-life balance, which implies that sporting activities are a factor for living more positive working adults' lives. On the other hand, playing sports currently were not reflected in the items related to work-life balance for female subjects, which implies that the effect of sports may weaken in female workers' lives for being more difficult to balance work and housework/parenting. Next, regarding the statement “Joining an collegiate sport club gives an advancement for employment,” it has been implied that the experience of playing sports as a part of their daily lives by joining an collegiate sport club during school days has led to realization of working adults' lives that achieve both the work and the sporting activities, and that this is the contemporary meaning of joining an collegiate sport club. In addition, the relationship between “those who currently play sports” and the promotion premium was also implied.

These finding has helped demonstrate the necessity of encouraging working adults to participate in sporting activities.

1 緒言

本研究の目的は、「体育会系は就職に有利」という言説に着目し、体育会系を含む大学時代の正課外活動が社会人生活における仕事の充実度やワークライフバランスに及ぼす影響を及ぼすのか、また、現在のスポーツ実施状況の有無は社会人生活にどのように関係するのかという点を明らかにすることである。

大学における正課外活動は、正課教育とともに社会で活躍できる人材育成機能の一端を担う役割も求められている。このように正課外活動を位置づけている大学

は多いものの、大学における正課外活動が社会人生活とどのように関連するのかというアプローチによる学術研究はあまりなされてこなかった。とりわけ、一般的に「体育会系は就職に有利」という言説は使われているものの、体育会系の取り組みが就職にどのような点で有利なのかについての研究は、大竹・佐々木（2009）による企業内のスポーツ活動と昇進に焦点を当てた研究や、橘木・齋藤（2012）によるスポーツ選手の学歴等に着眼した研究、また、松繁（2004）による英語力と昇進との関係についての研究など、特定テーマについての体育会系の特徴が検討されているものとなる。したがって、実際

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
* * 名古屋大学総合保健体育科学センター
* Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University
* * Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

に「体育会系は就職に有利」なのかを検証するには、大学の正課外活動について体育会系とそれ以外の活動の違いに着目して分析する必要がある。そこで、本研究では、正課外活動を体育会系、文化系、その他の活動と分けることによって、正課外活動から得られる力を含む社会人生活への影響について異なる活動間で比較検討する。

具体的には、現在雇用されている社会人を対象に、大学時代の正課外活動についてその活動別、性別、年代別に層化したインターネットによるアンケート調査を実施する。そして、社会人である現在から大学時代を振り返り、また、社会人である現在の意識調査を基に、大学時代の正課外活動の違いが社会人生活にどのような影響を及ぼすのか、さらに、現在のスポーツ実施状況の有無は社会人生活にどのように関係するのかについて統計分析を用いて明らかにする。

なお、本研究における用語の定義として、「体育会系」は体育会運動部と体育系サークルを包括し、同様に、「文化系」は文化部と文化系サークルを包括する。さらに、「体育会系は就職に有利」という場合の「就職」については、採用段階のみならず就職後の昇進・昇格や仕事の満足等の現在の状況も含むものとする。

2 先行研究の検討

体育会系出身者が有するとされる能力(金森、2018a; 2018b; 金森・蛭田、2018)について、まず、「非認知能力」の点から検討する。Heckman and Rubinstein (2001)は、幼少期の教育によって涵養された非認知能力 (non cognitive skills) がその後の長期的な成果に影響を与えることを示した。この非認知能力とは、戸田・鶴・久米 (2014) によれば、IQ やアチーブメント・テストに代表される認知能力に対して、パフォーマンスに影響を与えるその他の特性、パーソナリティ特性、選好等のことをいう。戸田・鶴・久米 (2014) は、非認知能力やそれを形成する幼少期の家庭環境が学歴や雇用形態、賃金といった労働市場における成果に及ぼす影響を分析し、課外活動に関する成果として運動系クラブや生徒会に所属したことがある者について賃金が高まる効果がみられたことを明らかにした。そして、それらを通して外向性、協調性、リーダーシップなどが将来の労働市場での成功に結び付いていることを示唆している。また、Cornelissen and Pfeifer (2007) は、スポーツ活動はリーダーシップ、チームワーク、社会化などのスキルや、教室内では身に付けられない規律、忍耐力、競争力、責任、自信、自尊心という行動習性を発達させることを明らかにしている。

このほか、体育会系活動やスポーツ活動と非認知能力との関係の研究としては、わが国では主として労働経済学の研究領域で進められてきた。大竹・佐々木 (2009) は、スポーツの活動歴がある従業員はそうでない従業員より早く昇進するのか (昇進プレミアム) という点について分析を行っている。具体的には、「スポーツ活動を通して苦しい練習に耐えてきた従業員は、忍耐力があり、根性があり、また協調性や職場を引っ張る統率力があると思われる」として高卒従業員と大卒従業員とを区別して内部昇進モデルを推定することから、スポーツ活動の有無が昇進に影響を与えるかを検証した。その結果、「高卒従業員ではスポーツをしている、またはしていた従業員ほど内部昇進をする確率が高い」が、「大卒従業員ではスポーツ活動は昇進に影響を与えないこと」が示された。そして、この会社の場合は、「高卒従業員に期待するものは根性、忍耐力や協調性、体力であり、それらに適した仕事に就かせていることが、これらの能力のある者が昇進しやすいようなキャリア・パスとなっている」と解釈された。一方、「大卒従業員に対しては、根性、忍耐力や協調性、そして体力を期待するのではなく、むしろ他に違った能力 (例えば、学問的、専門的能力) に期待して、それが発揮できる仕事に就かせている、あるいは、大学教育や大学生活が、高卒従業員ではスポーツで育まれる協調性などの能力を高めている可能性がある」として、大卒従業員のスポーツ活動による昇進プレミアムを否定している。

それでは、この知見は普遍的であるといえるであろうか。この著者ら自身も述べているとおり、対象が一社に限定され、またスポーツ活動以外の別の活動との比較検討もなされていないことから、結果も限定的であることが考えられる。そこで、本研究では、スポーツ活動に取り組んできた大卒従業員の昇進プレミアムは本当になるのか、体育会系以外の他の正課外活動に参加している者との比較検討を行う。

さて、わが国では大卒の体育会系について、「体育会系は就職に有利」という言説が現在もお使われており、「体育会系神話」という言葉に象徴されるように「体育会系就職」は他の学生と一線を画して優先的に語られてきた (東原、2008)。体育会系の有する能力について着目すると、大竹・佐々木 (2009) は、「忍耐力、根性、協調性、統率力」を挙げ、また、橘木・齋藤 (2012) は、「強い体力、先輩後輩のネットワーク、協調性やコミュニケーション能力などを含む非認知的スキル」を挙げている。さらに東原 (2011) は、文献検証から昭和初期の体育会系の人材イメージとして、「有用な身体、健全なる精神、快活な性格、広い交友関係、思想穏健」などを挙げ、「体育会就職」の特徴としてまとめている。

このように体育会系は、精神力、忍耐力、根性、協調性、交友関係、コミュニケーション力や強い身体を有すると一般的にイメージされている。特に、戦後から1990年あたりまでは日本の雇用慣行の下、企業は新卒一括採用というしくみでゼネラリストの採用を行い、学生に対して専門知識よりも基礎学力や頑張りなどを一般的に求めたことから、それに親和性を有した体育会系の能力は高い評価を得た。さらにこの頃までは、わが国の労働市場が一つの企業及び企業グループ内で定年まで勤めるという内部労働市場が中心であったため、上下関係や人間関係が重視され、それに必要な体力、忍耐力、協調性や人間関係構築力を有する体育会系人材は「最良の人材イメージとして君臨」(東原、2011) することとなった。

それでは、労働市場は内部労働市場から内部・外部労働市場折衷型(石山、2011)に移行し、正規雇用中心から非正規雇用が増大して定年までの終身雇用制が揺らいできた現在、企業が大卒者に対して求める能力は変化しているのだろうか。「新卒採用に関するアンケート調査結果⁽¹⁾」によれば、企業が選考にあたって特に重視した能力の上位3位までは、順にコミュニケーション能力、主体性、チャレンジ精神であり、主体性やチャレンジ精神という自律型人材が求められる人材像である。つまり、従来の定年まで特定の組織内で上手くやっていくのに必要な忍耐力や協調性から、グローバル社会で活躍するためのコミュニケーション能力、主体性などがより重視されてきている。以上から、従来から社会において有用とされてきた体育会系の活動から得られる力は、現在どのような意義があるのかという点についても考察する。

以上の先行研究の検討から、①現在スポーツをしている者、あるいは大学時代に体を鍛えていた者のスポーツ活動は社会人生活にどのように関係するのか、②体育会系大卒従業員の昇進プレミアムは本当にはないのか、③体育会系活動から得られる力は現在どのような意義があるのか、以上の3点を明らかにする。

3 研究方法

(1) 調査方法

本調査は、2017年3月7日から8日の2日間、株式会社マクロミルにインターネットによるアンケート調査を委託して実施した。対象は、委託会社の登録モニター(2016年6月時点で約120万人)である22歳から60歳までの全国の男女で現在雇用されている社会人(自営業を含む)とした。そのうち大学時代の正課外活動に関して、体育会系所属者(男女各200名;内訳は体育会運動

部男女各100名、体育系サークル男女各100名)、文化系所属者(男女各100名;内訳は文化部男女各50名、文化系サークル(男女各50名)、他の取り組みをしていた者(男女各50名)、何もしていなかった者(男女各50名)の4区分の条件にそれぞれ該当する者を対象とし、4区分を正確に行うため事前スクリーニングを実施した。その結果、男性400名、女性400名の合計800名から有効回答を得た。

インターネット調査を利用した理由は、「体育会の大学生の割合は、大学生全体の約8%」(読売新聞、2015)とされており、体育会系出身者を全国からランダムに選抜することは不可能に近かったこと、さらに、大学の学部学生数については、学校基本調査⁽²⁾による大学進学率からだけみても、本調査時に60歳の人が大学に入学した1975年は38.4%、2017年に大学を卒業した22歳の人が大学入学した2013年は55.1%に達しており世代間で異なっているため、世代毎に同程度のデータを回収するためには母集団の大きなデータを用いる必要があったためである。今回の調査では、基本条件に該当する1,349サンプルに調査依頼を配信して800サンプルが回収され、有効回答率は59.3%であった。なお、「なりすましや匿名性の問題」(大隅、2002)に対応するため、委託会社の担当者に対し不正回答が含まれないようデータチェックを依頼したことで不良回答は除かれている。

調査項目は、職業、業種、勤務先の従業員規模などの属性に加え、「大学時代の過ごし方を把握する項目」(20項目;以下、「大学時代の過ごし方」という。各項目内容は表3参照)及び「社会人である現在の仕事について把握する項目」(22項目;以下、「社会人である現在の意識」という。各項目内容は表1、2参照)の42項目を設定し、それぞれ4件法による回答得点(そう思わない・1点、あまりそう思わない・2点、ややそう思う・3点、そう思う・4点)を得た。なお、前者は回顧研究であり、後者は意識調査であるため、置かれた環境により異なる基準を持ち主観的になる点には配慮して解釈を行った。

本調査では、対象者を大学学部(医学部等6年制の者を含む)及び大学院修士課程卒業までを含めた。また、インターネット調査において、回答者の基本属性として「他の年齢階層に比べて若年層のモニター数が相対的に少ない」(佐藤、2009)という指摘を参考にして、世代区分別(20歳代から50歳代の4区分、ただし20歳代は22歳から、60歳は50歳代に含めた)にできるだけ人数が均等になるよう割り付けを行った。

なお、本調査は名古屋大学総合保健体育科学センター研究倫理委員会において承認を得た上で実施した(平成29年2月6日承認、受付番号28-33)。倫理的配慮として、調査依頼のメール配信時に「倫理的配慮と自由

意思での参加について」と題して、自由意思に基づいて参加して頂くこと、回答への匿名性は維持されること及び得られたデータは研究にのみ使用されるという内容を冒頭に付記し、本人の意思確認後研究参加できるように設定した。

(2) 分析方法

研究目的に基づき、以下の4種類の分析を実施した。

①二要因分散分析 (表1・表2)

「現在のスポーツ実施状況の有無」と「大学時代の正課外活動の所属」によって、「社会人である現在の意識」にどのような違いがみられるかを明らかにする目的で分析する。まず、「社会人である現在の意識」項目から、「現在、何らかのスポーツをしている(項目19)」を取り上げ、二値化(4件法の1・2=そう思わない、同3・4=そう思う;以下同様)した上で「スポーツ」要因とする。次に、大学時代の正課外活動として体育会系所属、文化系所属、他の取り組みをしていた、何もしていなかった、の4区分(以下、4区分という)を「所属」要因とする。そして「スポーツ」(2水準)と「所属」(4水準)を独立変数、「社会人である現在の意識」の各項目の回答得点(4件法)をそれぞれ従属変数とする2×4の二要因分散分析(小塩、2016)を男女別に行う。「所属」の主効果が有意になった項目については、4群間の多重比較(Tukey-Kramer法)を行う(池田、2013)。

本分析に先立ち、金森(2018a)は大学時代における正課外活動について体育会系及び文化系に限定した分析として、「所属」と「勉強との両立」を独立変数、上記と同じ「社会人である現在の意識」項目を従属変数にそれぞれ用いた二要因分散分析を行った。その結果、男性では勉強と両立していた体育会系所属者が相対的に肯定度の高い自己認識を有している一方、文武両道でない体育会運動部所属者ではその特徴がみられないことを明らかにした。また、女性では勉強と両立していた体育会系所属者が高い値を示したものの、文化系サークル所属者も両立・非両立ともに比較的高い値を示し、社会人としての自己評価については両立や所属による差はそれほどみられなかった。このように性別、所属や勉強との両立の違いで社会人としての自己評価に差が生じることが明らかとなった。このため、本分析では、「所属」要因の項目として体育会系、文化系に加えて、「他の取り組みをしていた」及び「何もしていなかった」という区分を設定し、分析対象を4区分に広げ検討した。なお、「社会人である現在の意識」から「現在、何らかのスポーツをしている」を独立変数として用いたのは、それが比較的客観度の高いデータとみなせること、また、

大学時代の体育会系所属者は全体として就職前におけるスポーツ経験者とみなせるため、過去と現在の両方からスポーツによる社会人生活への影響を検討できるのではないかと考えたからである。

②自覚的能力に関するグラフ (図1・図2)

「現在のスポーツ実施状況の有無」と大学時代の「所属」4区分による「自覚的能力」の違いをより詳細に比較検討する目的で、①から抜粋した該当データをそれぞれグラフ化する。その際、所属の違いによる得点差を見やすくするために折れ線グラフを用いる。なお、「社会人である現在の意識」の項目中、人間関係構築力(表1、表2における項目11)、忍耐力(同12)、折衝力・交渉力(同13)、コミュニケーション力(同14)に、体力(同8)、語学力(同15)を加えた6項目を本研究における「自覚的能力」として用いる。

③「大学時代の過ごし方」と現在の「自覚的能力」の肯定回答比率の4群間対比較 (表3)

①及び②では、「社会人である現在の意識」の各項目について、「現在のスポーツ実施状況の有無」と「所属」により比較した。これに対し、ここでは「大学時代の過ごし方」が「所属」の違いによってどのように異なるかを調べる目的で、「大学時代の過ごし方」の各項目について、「そう思う」と「ややそう思う」の肯定回答をした人の合計割合(肯定回答比率)を「所属」の4区分間で対比較する。この対比較には4区分間の人数に差がある場合の群間比較に適した方法であるライアン法(Ryan、1960)を用いる。さらに「社会人である現在の意識」の項目中、「昇進」及び「自覚的能力」に関する項目についても同じ方法を用いて分析する。

④「社会人である現在の意識」と「大学時代の過ごし方」についてのロジスティック回帰分析 (表4)

「社会人である現在の意識」の各項目に対して、「所属」の違いと年齢の影響を調整した条件で、「大学時代の過ごし方」の各項目がそれぞれどの程度影響しているかを明らかにする目的で分析する。まず、「社会人である現在の意識」の各項目をそれぞれ二値化し、そのうち仕事の充実度を表すと考えられる8項目を「仕事関連項目」(表4参照;項目1～7番とそれに便宜上19番「現在、何らかのスポーツをしている」を加える)として取り上げ、それに6項目の「自覚的能力」を加えた14項目をそれぞれ従属変数とする。そして、大学時代の過ごし方の15項目(20項目のうち5項目は4区分の一部を対象とするため除外する)を二値化して独立変数とし、男女別にロジスティック回帰分析を行いオッズ比による

比較検討を行う。なお、表を見やすくするために、「社会人である現在の意識」項目については項目番号の前に「W-」（Working adult の先頭文字）を、同様に「大学時代の過ごし方」項目については「S-」（Student の先頭文字）を付けた。

統計分析にはSPSS Statistics 25 for Windowsを用いた。

4 結果

（１）二要因分散分析（表１・表２）

「スポーツ」（現在のスポーツ実施の有無）と「所属」（４区分）による二要因分散分析の結果として、各質問項目についての所属別の平均値（Mean）、標準偏差（SD）、２つの主効果（スポーツと所属）のF値及び有意水準をそれぞれ一覧表に示した（表１は男性、表２は女性）。本分析では要因間に有意な交互作用はみられなかったため、２つの主効果に基づいて解釈を行った。

まず、男性のスポーツの主効果は21項目中14項目で有意であり、スポーツをしている群が高得点を示した。そのうち、項目番号１～７の仕事の充実度に関する項目については、「１今の仕事に満足している」「２希望の仕事に就いている」「３希望どおり昇進ができて」「６部下指導はできている」のそれぞれの項目でスポーツをしている群が有意に高得点であった。また、「１６休暇は十分取得できている」「１７休日は休養が取れている」「１８休日は家族や友人と楽しく過ごしている」というワークライフバランスに関連すると解釈される項目も同様に有意に得点が高かった。一方、所属の主効果が有意となる項目数は５項目とスポーツの主効果についての有意項目数よりは少なかったが、「７上司・同僚に恵まれている」を除きスポーツの主効果がみられた項目の一部と重なっていた。多重比較の結果から、「８体力はあると思う」について体育会系が他の３群に比較してそれぞれ有意に高得点を示し、また、「２０努力することは大切だと考えている」については「何もせず」が他の３群に比較してそれぞれ有意に低い得点を示した。

次に、女性のスポーツの主効果は、「２希望どおり昇進ができて」「６部下指導はできている」の仕事の充実度に関する一部の項目がスポーツをしている群で有意に得点が高かったが、所属の主効果が有意となる項目はみられなかった。

以上から、男性ではスポーツの主効果と所属の主効果から、現在スポーツをしていることや所属の違いが仕事の充実度やワークライフバランスに関係していた。一方、女性はスポーツの主効果についてのみ有意差がみられ、現在スポーツをしていることが昇進や部下指導ができるということに関係していた。

（２）自覚的能力に関するグラフ（図１・図２）

図１、図２は、それぞれ表１、表２における質問項目のうち自覚的能力に該当する項目の所属別平均値を各項目別に折れ線グラフ化したものである。男性（図１）では、現在のスポーツ実施状況の有無で自覚的能力に大きな差がみられた。すなわち、どの項目についても全体的に現在スポーツをしている男性は相対的に得点が高く、とりわけ「体育会系」は忍耐力と体力が高かった。一方、女性（図２）では、現在のスポーツ実施状況の有無による自覚的能力の差は男性ほどみられなかったが、所属の比較では、現在スポーツをしている文化系及び何もしていない者は、折衝力・交渉力やコミュニケーション力の得点が体育会系よりも高い傾向を示した。

また、語学力については、全体的に得点水準は低いものの、性別に関係なく現在スポーツをしている者は高く、そうでない者は低かった。さらに、折衝力・交渉力については性差が顕著にみられ、男性は語学力以外の４項目と同水準であるのに対し、女性は語学力に次いで低い傾向を示した。

以上から、男性では現在のスポーツ実施状況の有無で自覚的能力に比較的大きな差がみられたが、女性では男性ほど差がみられなかった。

（３）「大学時代の過ごし方」と現在の「自覚的能力」の肯定回答比率の４群間対比較（表３）

男性の体育会系については、表３の22項目中17項目で肯定回答比率が４群中トップを示した。そのうち、15項目の「大学時代の過ごし方」では11項目がトップであり、他の群と比較して全体的に充実した大学生活の過ごし方を示した。また、現在の「自覚的能力」についてもコミュニケーション能力以外全ての項目でトップであり、そのコミュニケーション能力も文化系に0.5ポイント低いだけであるため、体育会系の自覚的能力は他群と比較して相対的に高いことが確認できた。一方、女性の体育会系については、「自覚的能力」のうち、体力、人間関係構築力、折衝力・交渉力は他の３群より高い値を示したが、「大学時代の過ごし方」では文化系の方が肯定回答比率の高い項目が多かった。また、比率の差の検定から、男女とも「大学時代の過ごし方」において「体を鍛えていた」は、体育会系が他の３群より有意に高い値を示した。

以上から、他群との比較における体育会系の特徴については性差がみられ、男性は体育会系が他と比較して総じて肯定回答比率の高い項目が多かったが、女性は体育会系よりも文化系に肯定回答比率の高い項目が多かった。

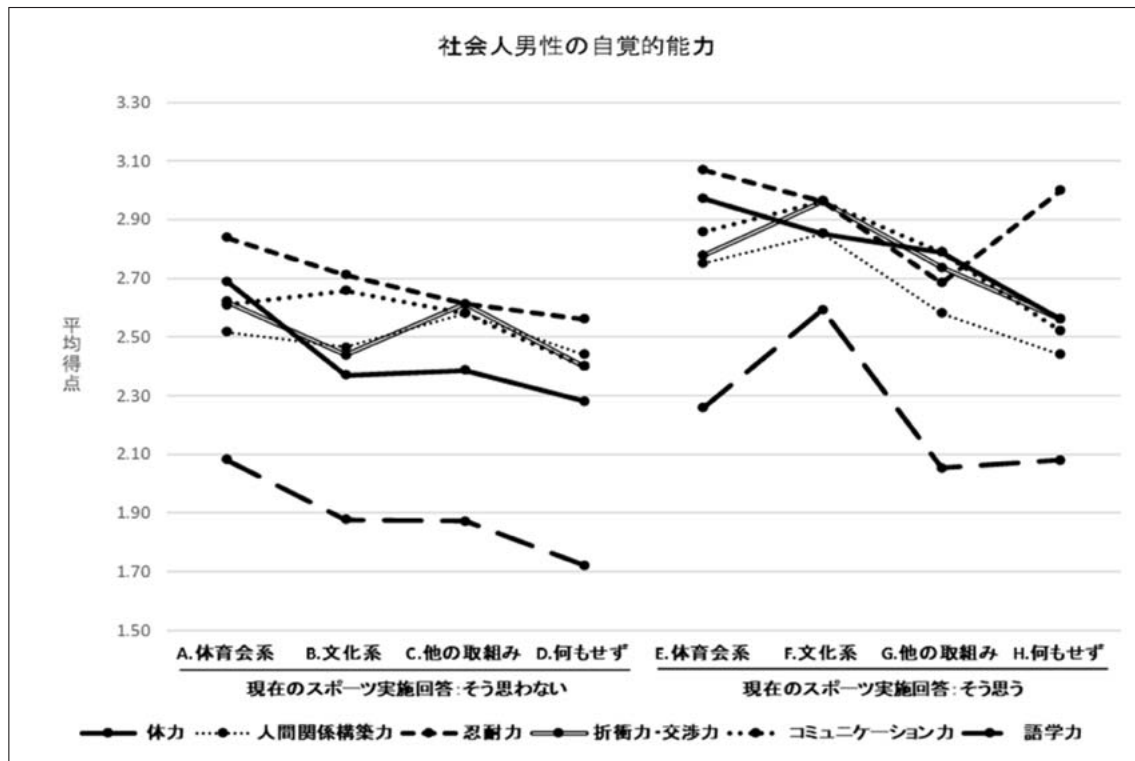


図1 社会人男性の自覚的能力（横軸のA～Hは大学時代の正課外活動の所属を示す）

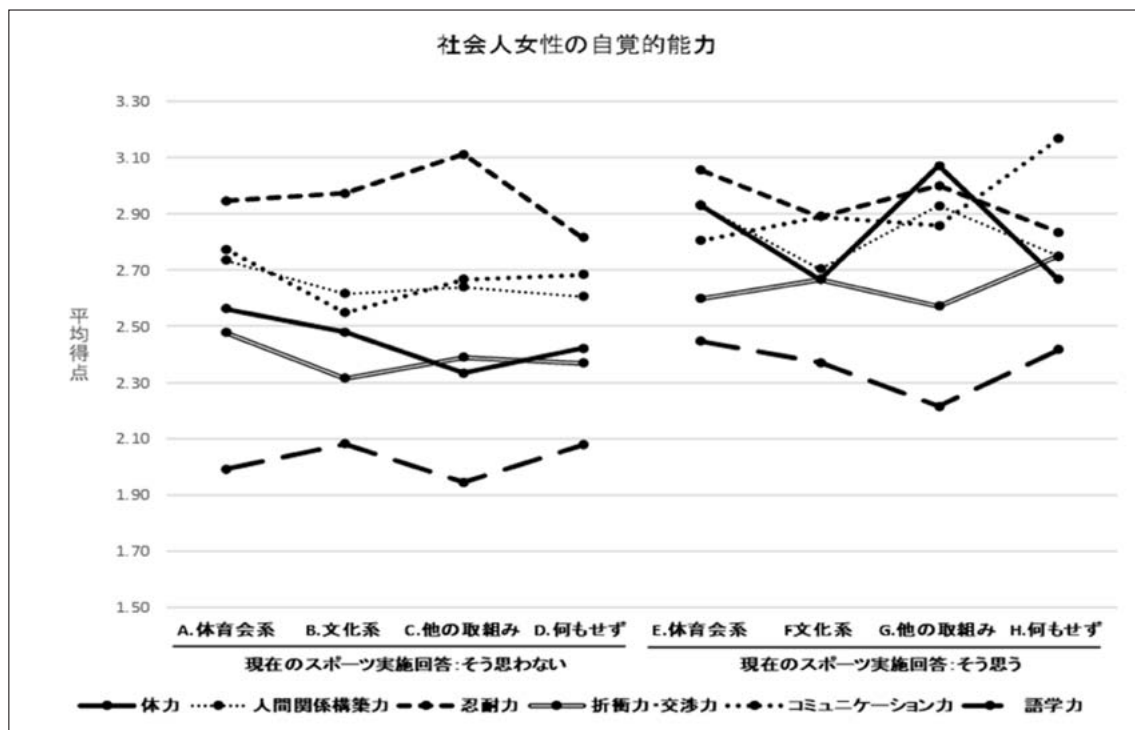


図2 社会人女性の自覚的能力（横軸のA～Hは大学時代の正課外活動の所属を示す）

表3 「大学時代の過ごし方」と「自覚的能力」の肯定回答比率の4群間対比較

大学時代の過ごし方(上段)		男性				女性				比率の差の検定 [†] (ライアン法)	
自覚的能力(下段)		体育会系	文化系	他の取組み	何もせず	体育会系	文化系	他の取組み	何もせず	男性	女性
3 勉強中心だった	7 忘れられない素敵な思い出がある 8 心が折れるような辛いことはなかった 9 将来に夢を描いていた 10 前向きに就職活動を行った 11 友人がたくさんできた 12 どんなことでも何でも頑張った 13 いい先生や先輩に出会えた 14 体を鍛えていた 15 努力することは大切だと考えていた 16 大学は結構上位クラスのところに通っていた 17 できるだけ多くの人と交流しようとしていた 18 憧れの人物に出会うことができた 19 人生は運に左右されると考えていた 20 将来を楽しみにしていた	21.0%	26.0%	14.0%	36.0%	19.5%	26.0%	24.0%	40.0%	ns	何>体
7 忘れられない素敵な思い出がある		73.5%	75.0%	70.0%	34.0%	66.0%	74.0%	58.0%	46.0%	文、体、他>何	文、体>何
8 心が折れるような辛いことはなかった		47.0%	55.0%	30.0%	44.0%	45.0%	38.0%	40.0%	42.0%	文>他	ns
9 将来に夢を描いていた		61.5%	64.0%	52.0%	54.0%	62.0%	68.0%	56.0%	58.0%	ns	ns
10 前向きに就職活動を行った		62.0%	51.0%	30.0%	54.0%	62.0%	61.0%	50.0%	46.0%	体、文>他	ns
11 友人がたくさんできた		63.5%	62.0%	50.0%	34.0%	67.0%	72.0%	56.0%	56.0%	体、文>何	ns
12 どんなことでも何でも頑張った		62.0%	53.0%	46.0%	44.0%	61.5%	65.0%	56.0%	42.0%	ns	文>何
13 いい先生や先輩に出会えた		64.0%	55.0%	52.0%	40.0%	63.0%	67.0%	52.0%	34.0%	体>何	文、体>何
14 体を鍛えていた		65.0%	24.0%	28.0%	20.0%	41.0%	15.0%	8.0%	12.0%	体>他、文、何	体>文、何、他
15 努力することは大切だと考えていた		80.0%	70.0%	66.0%	62.0%	79.5%	77.0%	78.0%	64.0%	ns	ns
16 大学は結構上位クラスのところに通っていた		49.0%	38.0%	34.0%	30.0%	43.5%	50.0%	46.0%	32.0%	ns	ns
17 できるだけ多くの人と交流しようとしていた		50.0%	47.0%	38.0%	24.0%	47.5%	54.0%	40.0%	30.0%	体、文>何	文>何
18 憧れの人物に出会うことができた		41.0%	37.0%	34.0%	26.0%	39.5%	41.0%	26.0%	28.0%	ns	ns
19 人生は運に左右されると考えていた		51.5%	46.0%	44.0%	38.0%	41.5%	46.0%	38.0%	32.0%	ns	ns
20 将来を楽しみにしていた		71.5%	65.0%	56.0%	58.0%	67.5%	69.0%	68.0%	54.0%	ns	ns
3 希望どおり昇進ができている	8 体力はあると思う 11 人間関係構築力はある方だ 12 忍耐力はある方だ 13 折衝力・交渉力はある方だ 14 コミュニケーション力はある方だ 15 語学力はある方だ	47.0%	44.0%	34.0%	30.0%	35.0%	46.0%	36.0%	36.0%	ns	ns
8 体力はあると思う		69.0%	52.0%	50.0%	50.0%	60.5%	53.0%	54.0%	50.0%	体>文	ns
11 人間関係構築力はある方だ		61.0%	55.0%	60.0%	54.0%	68.5%	59.0%	56.0%	64.0%	ns	ns
12 忍耐力はある方だ		78.5%	69.0%	64.0%	64.0%	78.0%	74.0%	82.0%	70.0%	ns	ns
13 折衝力・交渉力はある方だ		63.0%	54.0%	60.0%	54.0%	51.0%	47.0%	44.0%	48.0%	ns	ns
14 コミュニケーション力はある方だ		65.5%	66.0%	60.0%	50.0%	66.0%	58.0%	62.0%	68.0%	ns	ns
15 語学力はある方だ		34.5%	28.0%	24.0%	22.0%	34.5%	36.0%	32.0%	34.0%	ns	ns

[†] 4区分について、2群間毎の比率の差の検定を行った(ライアン法)。

[†] 体:体育会系、文:文化系、他:他の取組み、何:何もせず。

[†] 網掛けは4群中トップであるデータを示す。

表4 「社会人である現在の意識」と「大学時代の過ごし方」についてのロジスティック回帰分析

		大学時代の過ごし方 (独立変数)															年齢 区分	判別 正答率 (%)
		S-3	S-7	S-8	S-9	S-10	S-11	S-12	S-13	S-14	S-15	S-16	S-17	S-18	S-19	S-20		
		勉強中 心	素敵な 思い出	辛いこ とはな い	将来に 夢	前向き に就職 活動	友人が たくさ ん	何でも 頑張っ た	先生や 先輩と 出会	体を鍛 えてい た	努力は 大切	大学は 上位ク ラス	多くの 人と交 流	憧れの 人物に 出会	人生は 運に左 右	将来を 楽しみに		
男性	社会人である現在の意識 (従属変数)																	
	W-1 今の仕事に満足している			2.111 ^{***}		1.602 [*]	1.773 [*]							1.858 ^{**}		2.120 ^{**}	65.0	
	W-2 希望の仕事に就いている			1.782 ^{**}		1.654 [*]										1.721 [*]	67.5	
	W-3 希望どおり昇進ができている															1.783 [*]	62.5	
	W-4 職場の人間関係はうまく保っている			2.001 ^{**}			1.645 [*]									2.875 ^{***}	70.8	
	W-5 目指したい先輩や上司がいる					2.044 ^{**}								1.755 [*]		1.878 [*]	0.853 ^{**}	65.5
	W-6 部下指導はできている					2.736 ^{***}				1.991 ^{**}						1.645 [*]	68.5	
	W-7 上司・同僚に恵まれている					1.741 [*]										2.180 ^{***}	0.897 [*]	63.5
	W-19 現在、何らかのスポーツをしている		0.519 [*]	1.740 [*]		1.748 [*]				2.881 ^{***}		1.887 [*]	1.771 [*]					70.5
	W-8 体力はあると思う						1.844 [*]			2.096 ^{**}	2.073 ^{**}							68.5
	W-11 人間関係構築力はある方だ												2.215 ^{**}	1.640 [*]	1.670 [*]	1.674 [*]	1.138 [*]	66.0
	W-12 忍耐力はある方だ						2.040 ^{**}	2.417 ^{**}			2.407 ^{**}						1.157 [*]	75.0
	W-13 折衝力・交渉力はある方だ		1.771 [*]		2.003 ^{**}								1.869 ^{**}				1.161 ^{**}	64.5
	W-14 コミュニケーション力はある方だ							2.047 ^{**}					2.261 ^{**}		1.630 [*]			68.5
	W-15 語学力はある方だ			1.878 ^{**}						1.884 [*]		1.839 [*]	1.907 [*]	1.881 [*]				71.5
女性	W-1 今の仕事に満足している					2.052 ^{***}											1.165 [*]	61.5
	W-2 希望の仕事に就いている					2.011 ^{**}						1.959 ^{**}						62.5
	W-3 希望どおり昇進ができている	2.063 [*]		1.967 [*]														64.8
	W-4 職場の人間関係はうまく保っている		1.683 [*]									2.068 ^{**}			1.884 [*]			77.8
	W-5 目指したい先輩や上司がいる								2.267 ^{**}	2.431 ^{***}							0.885 [*]	63.3
	W-6 部下指導はできている					1.826 ^{**}		1.826 ^{**}										68.8
	W-7 上司・同僚に恵まれている					1.653 [*]		1.653 [*]										67.8
	W-19 現在、何らかのスポーツをしている			1.612 [*]						4.949 ^{***}								73.0
	W-8 体力はあると思う				1.770 [*]		1.757 [*]			1.685 [*]								61.0
	W-11 人間関係構築力はある方だ						1.899 [*]	1.869 [*]	4.333 ^{***}				1.773 [*]					70.5
	W-12 忍耐力はある方だ				2.026 ^{**}													76.3
	W-13 折衝力・交渉力はある方だ							1.853 [*]				1.855 ^{**}	2.738 ^{***}		1.640 [*]		1.231 ^{**}	70.8
	W-14 コミュニケーション力はある方だ						2.069 ^{**}	1.646 [*]					2.783 ^{***}					69.3
	W-15 語学力はある方だ	1.965 ^{**}			2.065 ^{**}													66.3

† *p<.05, **p<.01, ***p<.001

† 表中数字は有意なオッズ比 (OR) のみを示す。OR>1のとき独立変数と従属変数は正の関係にある。

† 5歳毎の年齢区分と所属4区分を調整変数として強制投入後、独立変数を変数増加法 (尤度比) で投入。

(4) 「社会人である現在の意識」と「大学時代の過ごし方」についてのロジスティック回帰分析(表4)

まず、「仕事関連項目」については、男性と女性とで一部異なる結果がみられた。男性では、大学時代の過ごし方のうち「S-10前向きに就職活動を行った」「S-20将来を楽しみにしていた」の2項目が、仕事関連のほとんどの項目について有意な正の関係のオッズ比を示した。一方、女性でも、「S-10前向きに就職活動を行った」が「W-1今の仕事に満足している」「W-2希望の仕事に就いている」について有意に高いオッズ比を示し、男女ともに大学時代の前向きな就職活動と現在の充実した職業生活との間に関連性のあることが示された。しかし、男性とは異なり女性においては「S-20将来を楽しみにしていた」との間に有意な正のオッズ比を示す仕事関連項目はみられなかった。

次に、現在の「自覚的能力」には、男女とも「大学時代の過ごし方」の項目のうちそれぞれ異なる組み合わせの項目が有意に関係していた。最も多くの「大学時代の過ごし方」項目と関係していたものは、男性では、「W-11人間関係構築力はある方だ」であり、「S-17できるだけ多くの人と交流しようとしていた」「S-18憧れの人物に出会うことができた」「S-19人生は運に左右されると考えていた」「S-20将来を楽しみにしていた」の4項目及び年齢区分とそれぞれ有意に正の関係を示した。また、男女ともに自覚的能力について2項目以上に有意に関連していた大学時代の過ごし方項目は「S-11友人がたくさんできた」、「S-12どんなことでも何でも頑張った」、「S-17できるだけ多くの人と交流しようとしていた」であった。

さらに、大学時代の「S-14体を鍛えていた」からは、「W-19現在、何らかのスポーツをしている」に男性ではオッズ比2.881、女性でオッズ比4.949の有意な関連を示した。学生時代に体を鍛えていたことが、現在スポーツをしていることと密接に関連しており、特に女性にその関連度が強くみられた。

以上から、所属や年齢の影響を調整した分析において、現在の「自覚的能力」に対して異なる組み合わせの「大学時代の過ごし方」が影響していたことで、必ずしも体育会などの特定の部活動に所属しなくても「大学時代の過ごし方」における実践や意識の持ち方次第で将来に有用な能力を涵養できる可能性が示された。

5 考察

(1) 「現在のスポーツ活動」と社会人生活との関係

まず、男性について、二要因分散分析(表1)のスポーツの主効果から、現在スポーツをしている者は仕事

の充実度に関する7項目(番号1~7)のうちの4項目(同1、2、3、6)及びワークライフバランス関連項目(同16、17、18)について有意に得点が高く、スポーツ活動が社会人生活をポジティブに送ることの関連要因であることが示唆された。特にワークライフバランス関連項目は有意水準1%未満の明確さを示したことから、現在スポーツをしていることが高い充実度を伴ったワークライフバランス実践型の社会人生活の一つの形態を表していると考えられた。また、自覚的能力についても、人間関係構築力以外の5項目(体力、忍耐力、折衝力・交渉力、コミュニケーション力、語学力)でスポーツの主効果は有意であり、スポーツ実施と有能感の関連性が示唆された。一方、所属の主効果として、表1の多重比較から、体育会系は「体力があると思う」という意識が他の3群と比較して有意に高く、身体的にも充実していることが特徴として示された。

次に、女性について、二要因分散分析(表2)のスポーツの主効果には、全体として男性より少ない項目数であるが実施の有無で有意差がみられ、現在スポーツをしていることの効果がみられた。その項目は、仕事関連では昇進、部下指導であり、自覚的能力では体力、折衝力・交渉力、コミュニケーション力、語学力であった。一方、ワークライフバランス関連項目にスポーツの主効果が有意となるものがみられなかった点が男性とは異なる特徴であった。これについては、仕事と家事・育児等との両立において女性の置かれている状況や意識にばらつきがあることが影響し、そのためにスポーツ実施の効果が相対的に小さくなっている可能性が推察された。

これらの調査データと統計分析に基づく男女の結果は、現在、わが国の政策課題である「働き方改革」や「健康経営」とも関係するところである。すなわち、今日、働き方に対する概念も変わってきており、「過労死」という言葉に代表される長時間労働などの課題に対して、従業員の健康とワークライフバランスをより重視する方向で「働き方改革」が進められている。また、一人ひとりの従業員の心身の持続的な健康保持・増進に配慮する「健康経営」(ローゼン、1994; 森永、2017)が株価に連動する時代⁽³⁾に突入している。このような方向性に対し、スポーツ活動を生活に取り入れていくことが社会人生活を充実させる関連要因であることを示した上記の結果は、有用な知見を提示するものと考えられる。

自覚的能力のうち、男女共通の特徴として、「語学力」についてのスポーツの主効果が「体力」に次いで高い明確さの有意水準を示し、スポーツをしている群の得点が高かった。須藤ら(2014)により、語学力習得には「根

気強さとエネルギーが必要」であり、「運動能力と英語習熟度が関連していること」が既に明らかにされているが、本研究の結果はこのことに関係している可能性が示唆された。

以上から、一部に性差はみられるもののスポーツ活動をしている社会人は、ポジティブな意識を持って仕事を含めた社会人生活を送っていることが明らかとなった。このことから社会人生活においてスポーツ活動への参画がより容易にできるような施策推進の必要性を提言したい。平成30年2月にスポーツ庁から発表された平成29年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査⁽⁴⁾」結果によると、週1日以上運動・スポーツをする成人の割合は51.5%（前年度42.5%）を占め、10代～40代において前年度より10ポイントを超える伸びを示した。働き盛り世代のスポーツ活動参加者の割合が伸びていることは、仕事の充実度やワークライフバランスの拡充につながる好ましい傾向にあり、いっそうの後押しが求められる。

（2）大学時代に「体を鍛えていた」者と社会人生活との関係

表4から、まず、「大学時代の過ごし方」のうち「体を鍛えていた」は、「社会人である現在の意識」のうち「現在、何らかのスポーツをしている」に対して男性のオッズ比が2.881、女性のオッズ比が4.949であり、それぞれ有意な関連を示した。すなわち、学生時代に体を鍛えていたことが現在のスポーツ活動実施と密接に関連しており、特に女性にその関連が強くみられた。

一方、正課外活動の所属別に大学時代に「体を鍛えていた」割合（表3）を見ると、男女ともに体育会系が突出して多く（男性65.0%、女性41.0%）、他の群は8～28%とかなり低いことから、大学時代にスポーツ活動への取り組みをより積極的に導入していく必要性が考えられる。具体的には、体育会運動部及び体育系サークルへの参加奨励に加え、高等教育の「教育課程」におけるスポーツの多様なカリキュラムやプログラムの配列も検討されるべきことが提言できる。また、「健康経営」の視点からも、社会人になってから体力や身体運動に取り組むだけでなく、生涯体力に向けての助走最終段階として高等教育におけるスポーツ活動を位置づける必要があり、とりわけ女性にその必要性があると考えられた。

次に、表4の「社会人である現在の意識」のうちの「体力はあると思う」をみると、男女に共通する二つの大学時代の過ごし方があった。一つ目は、「体を鍛えていた」であり、男性のオッズ比は2.096、女性のオッズ比は1.685であった。二つ目は、「友人がたくさんできた」であり、男性のオッズ比は1.844、女性のオッズ比は1.757でそれ

ぞれ有意な関連を示した。このことから、現在「体力がある」という意識の背景として、大学時代に体を鍛えていたことに加えて、豊かな交友関係の構築が関係していることが示唆された。大学時代に豊かな交友関係を築けた社会人が体力があると認識している理由について、今回のデータからは十分な説明はできないが、交友関係を通して日常活動がより活発により広範囲になっていたことは推測されることから、その活動をしてきたことが社会人としての自覚的体力の高さにも影響している可能性が考えられた。

以上から、大学時代に「体を鍛えていた」ことは、「現在のスポーツ実施」と密接に関連しており、そのことを通じてスポーツ活動を伴ったポジティブな社会人生活の実現につながっていると推察された。

（3）「体育会系は就職に有利」という言説の今日的意義

先行研究で確認したとおり、かつては体力、忍耐力、協調性や人間関係構築力を有する「最良の人材イメージ」として君臨していた体育会系人材であるが、近年は体育会系にどのような意義が見出せるのであろうか。

男性の体育会系について、表3の「大学時代の過ごし方」の項目中、採用段階の項目である「前向きに就職活動を行った」の肯定回答比率62%は4群中トップであり、また、自覚的能力もほぼ全てトップの得点であった。これらの結果は、現在においても他の所属と比較して、「体育会系は就職に有利」という言説は通用することを示していると考えられる。近年、企業はコミュニケーション能力や主体性などを重視しているが、体育会系のコミュニケーション能力は文化系に次いで僅差の2番目であり、従来から評価されてきた忍耐力、体力、人間関係構築力などは現在もお高い結果となっている。一方、女性の体育会系については、「前向きに就職活動を行った」は62%でトップであるが文化系とは僅差であった。自覚的能力については、体力、人間関係構築力、折衝力・交渉力はトップであったが、文化系や他の取り組みも同様に高かったため、女性の体育会系が取り立てて就職に有利とはいえなかった。

以上から、現在でも男性については、「体育会系は就職に有利」ということができる。また、表3の「大学時代の過ごし方」の項目中、「体を鍛えていた」では体育会系の男性は65%、女性は41%と共に他の3群より2倍以上多く、「体を鍛えていた」ことこそが体育会系の特徴といえる。このことは従来「体育会系は就職に有利」といわれた要因の一つである「強壮なる身体」を想起させるものの、それに加えて結果（4）で確認したとおり、学生時代に体を鍛えていたことが、現在スポーツをしていることと密接に関連していることも重要である。

つまり、学生時代から体育会系に所属して日常生活の一部にスポーツ活動を取り入れてきた生活経験が、社会人になっても仕事とスポーツ活動を両立させ、ポジティブな社会人生活の実現につながっていると解釈できる。このライフスタイルの実践こそが「働き方改革」「健康経営」時代における体育会系の今日的な意義であると考えられる。

(4) 体育会系出身者の昇進プレミアム

「現在のスポーツ実施状況」と「所属」の4区分による二要因分散分析(表1、表2)から、「希望どおり昇進ができています」のスポーツの主効果は、現在スポーツをしている男性では1%水準で有意、女性では5%水準の有意で高い値を示した。このことから、現在スポーツをしていることと昇進プレミアムは関係していることが示唆された。

一方、昇進についての所属の主効果は男女ともみられなかったことから、体育会系出身者の昇進プレミアムについては、表3及び表4を用いて確認する。まず、所属の影響を調整した表4からみて、大学時代の過ごし方のどの項目が、「希望どおり昇進ができています」と関係しているかについてみると、男性では、「前向きに就職活動を行った」(オッズ比1.654)、「将来を楽しみにしていた」(オッズ比1.783)でいずれも5%水準で有意であった。女性では、「勉強中心だった」(オッズ比2.063)、「心が折れるような辛いことはなかった」(オッズ比1.967)でいずれも5%水準で有意であった。次に、これらの項目について表3で4群間対比較の体育会系をみると、男性の「前向きに就職活動を行った」は体育会系が62.0%、「将来を楽しみにしていた」71.5%とともに4群中トップで大幅に肯定回答比率が高かった。一方、女性の「勉強中心だった」は4群中最下位、「心が折れるような辛いことはなかった」はトップではあったが他群との差があまりなかった。また、「希望どおり昇進ができています」の項目では、男性は体育会系がトップであったが、女性は文化系や他の取り組み以下であった。すなわち、大学時代の過ごし方の特徴からみると、男性の体育会系の昇進プレミアムの可能性は認められるが、女性の体育会系の昇進プレミアムはみられなかった。

以上から、まず、「現在スポーツをしている者」と昇進プレミアムについては、本分析のみでは言い切れないが関係性がある可能性が明らかとなった。次に、大竹・佐々木(2009)による「体育会系の大卒従業員の昇進プレミアムは高卒従業員と比較してみられない」という先行研究に対して、本研究からは、男性に限られるが、体育会系と昇進との間には関係性がみられ昇進プレミアムの可能性が推測される。

(5) 大学時代の正課外活動で高めている能力

大竹・佐々木(2009)の先行研究により「大学教育や大学生活が、高卒従業員ではスポーツで育まれる協調性などの能力を高めている可能性がある」と指摘された点について考察する。本研究は高卒者のデータを取っていないため比較検討はできないが、正課外活動の所属の影響を調整した条件で大学時代の過ごし方が社会人である現在の意識にどのような影響があるのかをみた結果、能力ごとに関係する大学時代の過ごし方の項目はそれぞれ異なり、また、性別によってもその関係性は異なっていた。さらに、オッズ比からそれぞれの影響の強さも異なっていた。このことから、大学時代の正課外活動の所属にかかわらずこれらの能力は得られるが、「大学時代の過ごし方」のうち表4で示された「特定複数項目の組み合わせ」が重要であることが示唆された。

以上から、大学時代に正課外活動として必ずしも体育会系などの部活動に所属しなくても社会人として必要な能力を涵養することは可能であるが、それらを一つの活動で得ようとするには、主に体育会系または文化系の正課外活動がその場となっていることが推測され、正課外活動への参加は多くの力を培う重要な機会であると示唆された。

6 結論

本研究は、「体育会系は就職に有利」という言説に着目し、大学時代の正課外活動の所属の違いが社会人生活における仕事の充実度やワークライフバランスにいかなる影響を及ぼすのか、また、現在のスポーツ実施状況の有無は社会人生活にどのように関係するのかという点を検討した。分析及び考察から得られた知見は以下のとおりである。

まず、現在スポーツをしている男性は、仕事の充実度に関する項目及びワークライフバランス項目が有意に高得点で、スポーツ活動が社会人生活をよりポジティブに送ることの関連要因であることが示唆された。一方、女性においてワークライフバランス項目に現在のスポーツ実施状況の効果がみられなかったことから、仕事と家事・育児の両立課題も含めた現在の社会人女性のライフスタイルにおいてスポーツ実施の影響度が相対的に小さい可能性が推察された。

次に、「体育会系は就職に有利」という言説については、学生時代から体育会系に所属してスポーツ活動を日常生活の一部にしていた経験が、社会人になっても仕事とスポーツ活動を両立させたポジティブな生活の実現につながっており、これが体育会系の今日的な意義であると考えられた。さらに、「現在スポーツをしている者」

と昇進プレミアムは関係性のある可能性が示唆された。

本研究の意義は、大学時代の正課外活動が社会人生活にどのような影響を与えているのかについて分析し、正課外活動への参加の重要性とスポーツ活動が社会人生活をよりポジティブに送る要因であることをデータ分析から明らかにしたことである。このことは、社会人のスポーツ活動への参画を推進していくことの必要性をより高め、また、高等教育の「教育課程」におけるスポーツの多様なカリキュラムの配列を促すと考えられる。

しかし、本調査は意識調査に基づいているため、各人の主観に偏った回答が含まれている可能性がある。また、社会人である現在から過去を振り返る回顧研究であるため、大学時代と現在という異なる時期に対して同時に回答を得ており、同じ人にとって異なる時期の回答でも相互に類似性・関連性が強くなりやすいという傾向にあるという限界がある。このため、今後は客観的なデータが多く含まれる設問を用意して調査を行う必要がある。

今後、働き方改革が進みワークライフバランスがますます推進され、さらに、健康職場の実践が多くの企業に広まることが想定される。長時間労働が当たり前に行われてきた今までの働き方とは異なる働き方のパラダイム転換が起きようとしている時に、本研究の知見から仕事とともにスポーツ活動を行うことが仕事の充実度やワークライフバランスを実現するための重要な要因であり、そのスポーツ習慣は学生時代からの影響を受けていることを示すことができた。就職前のスポーツ経験の違いを含め個人の実情に応じて、スポーツ活動をいかに日々の社会人生活に取り入れていくかについての研究が今後の課題である。

[注]

- (1) (一社) 日本経済団体連合会「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」
<https://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf>
(参照日2018年4月1日)
- (2) 文部科学省「学校基本調査」データを e-Stat「学校基本調査・年次統計」の「高等教育機関への入学状況（過年度高卒者等を含む）の推移」(Excel) からダウンロードした。
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001015843>
(参照日2017年5月20日)
- (3) 経済産業省「健康経営銘柄」
http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/kenko_meigara.html
(参照日2018年3月20日)
- (4) 平成29年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1402343.htm

(参照日2018年8月16日)

参考文献

- Cornelißen, T. and Pfeifer, C. (2007) The impact of participation in sports on educational attainment: New evidence from Germany. *Economics and Education*, IZA Discussion Paper, 3160:1-23.
- Heckman, J. and Rubinstein, Y. (2001) The importance of noncognitive skills: Lessons from the GED Testing program. *American Economic Review*, 91(2):145-149.
- 池田郁男 (2013) 統計検定を理解せずに使っている人のためにⅢ. 化学と生物, 51 (7): 483-495.
- 石山恒貴 (2011) 組織内専門人材の専門領域コミットメントと越境的能力開発の役割. *イノベーション・マネジメント*, 8: 17-36.
- 金森史枝 (2018a) 大学時代の正課外活動における所属の違いが社会人生活の意識に及ぼす影響: 体育会系と文化系との所属の違いに着目して. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 64 (2): 93-105.
- 金森史枝 (2018b) 幼少期から取り組んだ剣道を通して培った力は仕事にいかにか活かされたのか: 大企業の総務担当者としてのメンタルヘルス問題への関わり. *総合保健体育科学*, 41 (1): 31-43.
- 金森史枝・蛭田秀一 (2018) 大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義: 体育会運動部活動を通して何を習得しているのか. *総合保健体育科学*, 41 (1): 45-54.
- 松繁寿和 (2004) 英語力と昇進・所得: イングリッシュ・デバイドは生じているか. 松繁寿和編著, 大学教育効果の実証分析. 日本評論社. 67-88.
- 森永雄太 (2017) 「健康経営」とは何か: 職場における健康増進と経営管理の両立. *日本労働研究雑誌*, 82: 4-12.
- 大隅 昇 (2002) インターネット調査の適用可能性と限界. *行動計量学*, 29 (1): 20-44.
- 大竹文雄・佐々木勝 (2009) スポーツ活動と昇進. *日本労働研究雑誌*, 587: 62-89.
- 小塩真司 (2016) 事例研究で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析. 東京図書.
- ローゼン・宗像恒次訳 (1994) ヘルシー・カンパニー: 人的資源の活用とストレス管理. 産能大学出版部.
- <Rosen, R.H. (1991) The healthy company: A human resources approach.>
- Ryan, T.A. (1960) Significance tests for multiple comparison of proportions, variances, and other statistics. *Psychological Bulletin*, 57(4):318-328.
- 佐藤博樹 (2009) インターネット調査の限界と有効性. 石田浩ほか編, 信頼できるインターネット調査法の確立に向けて. 東京大学社会科学研究所 SSJDA, 42: 133-142.
- 須藤路子・望月明人・伊藤憲治・桐野衛二 (2014) 第二言語習熟度は社会認知能力および運動能力と関連があるのか?: 異種能力の英語習熟度への影響. *音声研究*, 18 (2): 1-9.
- 橋本俊昭・齋藤隆志 (2012) スポーツの世界は学歴社会. PHP 新書.
- 戸田淳仁・鶴光太郎・久米功一 (2014) 幼少期の家庭環境, 非認知能力が学歴, 雇用形態, 賃金に与える影響. 独立

行政法人経済産業研究所, RIETI Discussion Paper Series, 14-J-019.
東原文郎 (2008) 〈体育会系〉神話に関する予備的考察: 〈体育会系〉と〈仕事〉に関する実証研究にむけて, 札幌大

学総合論叢, 26: 21-34.
東原文郎 (2011) 〈体育会系〉就職の起源 - 企業が求めた有用な身体: 『実業之日本』の記述を手掛かりとして, スポーツ産業学研究, 21 (2): 149-168.
読売新聞 (2015) 4月21日付朝刊, 35面.